

## 3章 教育活動

### 1 教育理念

日々の事件や出来事から今どのような時代に生きているかを読みとり、それにどのように対応するのかを総合的に判断する能力は、女性が職場で仕事をする上でも地域や家庭で自立した市民として活躍する上でも極めて大切な能力である。また、21世紀の国際化・競争化社会で求められる情報処理能力、論理的思考力、判断能力は、自立して生きる女性にとって不可欠な能力である。こうした能力の育成が学部教育の理念である（平成18年度実践女子大学の点検・評価報告書、pp.12-13）。

この学部理念に則って、人間社会学部では以下に示すような特色ある教育を展開してきた。

### 2 カリキュラム

幅広い教養教育を目指す総合教養科目と学科の教育理念・目標に沿った専門科目から、カリキュラムは構成された。

総合教養科目は、人間と文化、科学と環境といった5つの教養科目群と英語や中国語等の外国語や日本語のコミュニケーションおよびパソコンの運用スキルを習得する情報コミュニケーションとで構成された。

専門科目は、社会科学と人文科学からなる専門分野の基礎を習得すると共に、各専門分野の展開が体系的に学習できるよう、基礎科目、基幹科目、展開・応用科目、実習科目、演習科目の5つの科目群で編成された。基礎科目は、学部の基本的コンセプトを構成する「人間」と「社会」についてその基礎的知識を修得させ、本学部の幅広い専門教育への動機づけをはかることを目的とした（学部等の設置の趣旨等を記載した文科省提出書類、p10）。したがって、これに該当する科目は必修科目として1年次に配当された。基幹科目と展開・応用科目は、学生の関心に沿って「人間」や「社会」に関する科目を選択できるよう用意した科目である。「人間」を代表する科目は心理系とコミュニケーション系の科目であり、「社会」を代表する科目は社会系とビジネス系の科目である。演習科目（ゼミ）は、1年次から4年次まで各学年に配置された必修科目であり、詳しくは次項で述べる。

### 3 演習科目（ゼミ）

専任教員全員がゼミを担当する。学生は1年次（演習Ⅰ）から4年次（演習Ⅳ）まで学年ごとにゼミ指導を受ける。

学生に多様な学習機会を与えるという観点から、1年次と2年次では、半期（セメスター）ごとに指導教員が変わる。1年次の演習（演習ⅠAとⅠB）では、クラス担任の役割を担う教員と親しく接することにより、学生生活や大学で学ぶことの意味を確認し、学際的・総合的なカリキュラムを採る本学部の教育内容の輪郭や特徴を具体的に理解し、学生がこういった教育に適応できるようその導入をはかるようにした。2年次の演習（演習ⅡAとⅡB）では、大学で学習・研究を行う上で必要となる読解力や表現力などの基本的能力の訓練を行うと共に、3年次・4年次の演習選択の意識づけを行う。

2年生の後期になると、学生は3年次と4年次に属することになる教員のゼミを選択する。標準的なゼミは専任教員1名と10名程度の学生から構成され、卒業までの2年間、同じメンバーで学習する。3年次の演習（演習ⅢAとⅢB）では、教員の専門性を生かしつつ、学生が主体的にテーマを選んで学び、専門的知識や研究の方法論を身につける。また、学習や研究の結果をまとめ、発表できる能力を修得する。4年次の演習（演習ⅣAとⅣB）では、教員は卒論の作成に向けた指導をおこない、各学生は研究成果を卒論としてまとめる。卒論をまとめた後は、プレゼンテーション能力を高めたり、後輩の3年生に対して卒論作成を意識づけたり、他の同じ分野の教員に対して卒論の内容を知らせたりすることを目的として、卒論発表会を実施している。



図3-1 ゼミ風景



図3-2 卒論発表会

## 4 アカデミック・アドバイザー制度

専任教員が学生一人一人を担当し、学生の成績や履修状況等を考慮しながら、履修相談や学生指導を行う制度（高校の担任制度に近い）を本学部でも採っている。本学部ではこれをゼミ担当教員が担っている。アカデミック・アドバイザーが入学時から卒業時まで継続的に指導する体制をとることで学生の修学指導に責任を持ち、また、きめ細やかな学生のサポートを実現している。

ゼミ担当教員はアカデミックな側面での指導はもちろんのこと、ゼミ合宿や後述する新入生セミナーなどを通じて、生活や進路面の指導もおこなっている。



図3-3 ゼミ合宿

## 5 少人数教育

1年ゼミと2年ゼミは20名前後の学生から構成され、3年ゼミと4年ゼミは10名前後の学生から構成されている。これは教員と学生間の対話（コミュニケーション）の円滑化に寄与するのみならず、学生同士のコミュニケーションの活発化に寄与している。こうした密なふれあいによって、学生への修学指導が的確におこなわれ、また学生のあるいは双方の人的成長が促される。

外国語教育においても、少人数クラス（30名程度）による授業が展開されていて、きめ細かい指導を実施している。専門科目についても、最も聴講学生の多い基礎科目であっても、前期と後期に開講することによって、学年の半分の学生（80～90人）に講義をしている。基幹科目の半数以上も前期・後期開講であり、履修学生数は更に少ない。

## 6 新入生セミナー（実践での四年間をプランニング）

「友達がたくさんできました」「とても良い体験になりました」「今まで関わったことのない人と関わることができたので良かったです」「先輩の話を通じて直接聞いたのがとても良かったです」「すごく楽しかったです」等々の喜ばしい感想が、新入生セミナー実施後のアンケート自由記載回答に毎年寄せられます。学生生活支援委員としてここ数年間を本セミナーの運営に当たって来ましたが、こうした嬉しい言葉に触れると大小の苦勞が報われます。

本学部では2004年の設立以来、入学間もない4月、キャンパスを離れて学生と教職員が自然溢れる環境の下で将来を語り合い、学び合う機会である一泊二日の新入生セミナーを開催してまいりました。1年目から10年目までは緑豊かな八ヶ岳において、新キャンパスに移った今年度からは、眼下に真っ青な太平洋が広がる南房総がその舞台となっています。「実践入門セミナー」のクラス毎にバスに揺られ、引率の担任教員やファシリテーター役の先輩達ともおしゃべりに花が咲きます。

全員で美味しい昼食をいただくと、一日目のメインイベントである「実践での四年間を有意義に過ごすには」と題したラベル集約法ワークショップに入ります。大学生という人生を左右する貴重な時期に具体的にどのようなことをしたいのか、それはいかに実現できるか、数人のグループに分かれて議論し、それぞれの事項の因果関係、相互関係、相反関係などを模造紙に図式化していきます。「授業は休まずAを多く取る」「英語の資格試験を受ける」「サークルなどで色々な人間関係を持つ」「ボランティア活動を頑張る」といった具体的な決意がある一方で、「一期一会を大切にする」「常に感謝する」のような精神論的なものもあり、学生の発想力に驚いています。次に、出来上がった展開図を示してプレゼンテーションを行い、他のグループメンバーとも活発に意見の交換がなされる様子は、コメンテーターを務める教員から見てもいつも感心させられるものです。最後には、数時間をかけてプランニングした「これからの四年間の自分」を自分だけのエッセイにしたためて、心に刻みます。



図3-4 ラベル集約法の実施（実践での4年間をどう過ごすか）

夕食後には先輩学生 10 名がプレゼンターになって全体会が行われ、様々な体験談が披露されます。試験勉強の仕方、ゼミ活動、海外ボランティア、学友会活動、サークル活動などなど、どれも身近で大変役立つと評判です。さらに、「もっと先輩の話が聞きたい」との要望から生まれたのが全体会後の先輩相談コーナーで、夜のふけるまでお菓子をつまみながら、膝を交えての先輩・後輩トークは続きます。

二日目は思い切り羽を伸ばして楽しむリクリエーション・デーが用意されています。10 年目までは絶叫マシンで有名な富士急ハイランドで、今年度は皆が大好きな東京ディズニーランドで、友情の輪を広げました。一日目の真剣な眼差しとは一変し、笑顔がいっぱいの二日目は夕刻で終了となります。

「一生の友」「一生の師」との出会いを祈念しつつ、これからも本学部の新入生セミナーを続けてまいりたいと願います。(阿佐美 敦子)

## 7 学生との共同作業（広報媒体のプロジェクトの作成）

人間社会学部では学生有志とともに公報媒体の作成を行った。当初、人間社会学部のウェブサイトは非常にシンプルで必要最低限の情報しか掲載されていなかった。そこで 2007 年に一期生の渡部真理子氏が、効果的なウェブ媒体における情報発信に関する内容を卒業研究に取り上げ、他大学のウェブサイト、働く女性を対照としたサイトの比較研究を行い、加えて在学生を対象としたサイトに関する調査を行い、これらの結果をもとに人間社会学部に適切なサイト構築を行った。

また翌年には、二期生の鈴木沙緒梨氏もウェブサイトにおける掲載写真について、アクセスデータ分析や前年同様の比較検証、学内調査を行い、改善を目指した。これらのことで、アクセス数などを踏まえ、効果が見られたといえよう。

その後、関係教員の管理・運営を続け、今日に至る。現在は学園の方針により、静的な内容は大学公式ページへの移行、動的な内容は Facebook での掲載を行うようにしている。図 3-5 は現在(2014 年 8 月現在)の学部ウェブサイトのウェルカムページ、図 3-6 は学部公式 Facebook のトップページである。



図 3-5 学部ウェブサイト  
ウェルカムページ



図 3-6 学部公式 Facebook

また学部パンフレットは当初、教員で企画・製作していたが、2008 年に二期生の尾形由貴氏による大学パンフレットに関する卒業研究も含め、学生有志者数名が中心となり、2009 年用の学部パンフレットを企画・製作を行った。このパンフレット製作プロジェクトは 2008 年をはじめ、2010 年まで、授業外活動として学生有志で作成した。2011 年度からは授業内課題および教員による企画・製作に発展した。次の図はこの企画の最初のパンフレットのゲラである。(竹内 光悦)



図 3-6 最初の学生主体のパンフレットのゲラ

## 8 キャリア教育

学部創設時、就職実績のない本学部では、他学部と同水準の就職率および内容を獲得し、今後、それを維持・向上させるためにも他学部以上にキャリア教育を積極的に推進する必要があった。平成18年度に、長尾演雄学部長より学部の重点目標としてキャリア教育の充実が挙げられ、人間社会学部の特別事業計画の1つとして、キャリア教育を支援する施策を実施することになった。特別事業計画・教育課題「キャリア支援教育の推進」は、平成19年度で開始し平成21年度に終了したが、それ以降も引き続き、キャリア教育をテーマとした特別事業計画が提案され、特別事業計画・教育課題「学部レベルでのキャリア教育の推進（平成22年度からの3カ年計画）」が実施された。

キャリア教育とは、フリーター・ニート化や就職後のミスマッチを防ぐために、学生のキャリア意識を高め、進路目標の決定を支援し、進路目標の決定後はその実現に向けた様々な支援を行うことである。その1つは、適職適性検査、就職実践模擬試験、経済力テスト、エントリーシート書き方講座などの就職に向けた実践的な支援である。第2は学部主体のインターンシップのあっせんであり、第3は卒業生あるいは就職内定4年生が在校生に対して就職のアドバイスをする交流会であった。（高橋 意智郎）



図3-7 就活応援会（2013年、2014年1月）

## 9 講演会と特別講義

人間社会学部では開設当時から現在まで、年に1回程度、「人間社会学部公開講演会」を実施してきた。主な対象は、人間社会学部の学生であるが、多学部の学生や教職員の参加も歓迎した。その例をいくつか以下に示す。また、半期の特別講義では、一般市民にも公開している。なお、当学部の教員が大学主催の公開市民講座の講師になったり、大学が関与する各種講演会の講師になったりすることも多いが割愛する。

## 9.1 人間社会学部講演会

- ・テーマ：「女性教育の過去・現在・未来」

①「下田歌子と女性教育」(2004年10月9日)

講師：米田 佐代子(元山梨県立女子短期大学)、飯塚 幸子(実践女子大学学長)、影山 輝國(国文学科教授)

②「人間社会学と女性の未来」(2004年10月16日)

シンポジスト等：長尾 演雄(人間社会学部長)、飯田 良明(人間社会学科教授)、高木 裕子(人間社会学科教授)、広井 多鶴子(人間社会学科助教授)、阿佐美 敦子(人間社会学科専任講師)、鹿嶋 敬(日本経済新聞社論説委員)

③「21世紀の女性像 生き方、働き方」(2004年10月23日)

シンポジスト等：湯原美 陽子(元カリタス女子短期大学学長)、市川 幸子(武蔵野大学講師・フリーエディター)、村田 幸子(ジャーナリスト・元NHK)、野中 裕子(東急ホテル)、久保田 恭子(三陽商会)、竹田 ますみ(縄文アソシエイツ・元阪急百貨店)

- ・学祖生誕 150 年記念人間社会学部開設記念公開シンポジウム(市民対象)

テーマ：「男女共同参画の時代と女性の自立」(2004年11月20日)

講師等：樋口 恵子(評論家・東京家政大学名誉教授)、黒崎 伸子(独立行政法人国立病院機構長崎医療センター 小児外科医長)、川村 正子(ジョンソン・エンド・ジョンソン 広報部長)、吉岡 睦子(弁護士)、鹿嶋 敬(日本経済新聞編集局編集委員)

- ・テーマ：「映像と地域」(2005年5月13日)

講師：花堂 純次(映画監督)

- ・テーマ：「学祖下田歌子の原風景—故郷岩邑の教育風土—」(2008年7月10日)

講師：鈴木 隆一(岐阜県恵那市教育委員、元岩村町教育長)

- ・テーマ：「女子大生のパーソナルブランド戦略」(2008年12月18日)

講師：山本 秀行(パーソナルブランド協会代表理事)

- ・テーマ：「青少年の犯罪の現状とその処遇」(2009年7月17日)

講師：今村 洋子(元法務省横浜少年鑑別所所長、現在、播磨社会復帰促進センター社会復帰促進部スーパーバイザー・部門責任者)

- ・テーマ：「社会で働き、社会に貢献することとは」(2012年5月10日)

講師：亀井 淳(株式会社セブン&アイホールディングス取締役・株式会社イトーヨーカ堂代表取締役社長・最高執行責任者)



- ・「世界と日本の子どもたちを支援するということ 認定 NPO 法人国境なき子どもたち (KnK) の活動」(2012 年 11 月 29 日)  
講師：佐々木 恵子 (認定 NPO 法人国境なき子どもたち)
- ・「児童福祉の現場」(2012 年 11 月 16 日)  
講師：小笠原 快 (横浜市杜の郷子ども家庭支援センター相談員)
- ・テーマ：「ソーシャル・メディア時代の就職活動」(2012 年 11 月 30 日)  
講師：高橋 暁子 (IT ジャーナリスト・コンサルタント)
- ・テーマ：「伝統文化の継承」(2013 年 1 月 15 日)  
講師：吉田純子 (文化庁文化財調査官・本学非常勤講師)
- ・テーマ：「宮城県石巻市からの報告—3 月 11 日を生きて」(2013 年 5 月 16 日)  
講師：阿部 和夫(石巻市元教育長)

## 9.2 特別講義

最近の特別講義の 1 つは、「ワーク・ライフ・バランス論 (コーディネーター 鹿嶋 敬)」である。少子化問題と絡んで、ワーク・ライフ・バランス (仕事と私生活の調和) 社会をいかに形成するかが、日本の大きな課題になっていることから、本講座では企業のトップやワーク・ライフ・バランスの担当者のほか、官界の政策担当者や大学・シンクタンクの研究者らに週替わりで教壇に立ってもらい、最先端の情報を講義してもらった。

もう 1 つは、「ダイバーシティ社会論」である。企業では国籍、性別、宗教、年齢などが異なる多様な人々が働いている。この傾向を多様性 (ダイバーシティ) といい、多くの企業にこの推進が迫られている。2013 年前期には、同学部の教授のほか、学外からも多彩な分野の専門家を招請し、「ジェンダー・ダイバーシティ」、すなわち性差別のない社会の形成をテーマに、最先端の取り組みや研究動向を紹介した。